

讀

論

藏

庫

江苏工业学院图书馆
书章



鏡花全集 卷五 第五回配本（全二十九）

昭和十五年三月三十日 第一刷發行
昭和四十九年三月四日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

袖屏風	(明治三十四年十一月)	一
女仙前記	(明治三十五年一月)	八
きぬく川	(明治三十五年五月)	一九
妖僧記	(明治三十五年一月)	二七
祝杯	(明治三十五年一月)	二八
波がしら	(明治三十五年二月)	三〇
青切符	(明治三十五年五月)	三九
やどり木	(明治三十五年八月)	三七
お留守さま	(明治三十五年九月)	三六

親子 そば	三人客	(明治三十五年十月)	二七九
起	誓文	(明治三十五年十一月)	二九三
舞	の袖	(明治三十六年四月)	三九五
二世	の契	(明治三十六年一月)	四八五
千歳	の鉢	(明治三十六年一月)	五二五
置	炬燵	(明治三十六年三月)	五三七
伊勢	之卷	(明治三十六年五月)	五四九
藥	草取	(明治三十六年五月)	五八九
俠	言	(明治三十六年五月)	六二九
鷺	の灯	(明治三十六年九月)	六四五
留守	見舞	(明治三十七年三月)	六八三

袖
屏
風

一彩先生

巳年十八

▷
—
▷

境内

尼興行

露草

朧富士

通り魔

長夜

一村雨

一 彩先生

一

「當家一流人相家相、望事、願事、旅立、縁談の吉凶、方位、方角、失物の判断、」
當今は知らず一しきり仲見世の右側、金龍山淺草餅の手前の角を曲らうとする邊に、烏帽子を冠り、素袍を着て、反齒隠と俗にいふ手巾を巻いた美人の賣卜が顯れて、夜々通行の者を驚かした。

風屏袖

其とは趣を異にするが、爰に又異様な賣卜者、靴を穿き、釦のきらびやかな、學校の制服で、目廂の附いた帽を頂いた年若な人物、武州多摩郡五宿を良過ぎて駒返村に至る、甲州街道に沿うて左の方、南に三町ばかり、並木から直ぐに其の一叢の樹立も見える、土地の鎮守の秋の祭、夜宮といふのに、奥の院の裏手に當る田圃の細道、小流の際なる薄原を背後に、往來に向うて、杉の切株の頃あひなのに腰を懸けて控へたのである。

先生、家を九曜軒、號を一彩と云ふ、即ち九曜軒一彩、日頃九星の術を修し、易學に達した秀才、本姓萩原、名は要介、好こそものはと諺にもいふ、分けて慾氣がないのだから、狙ふ的は違ふけれども、百歩柳葉を射て、當を外さぬ妙あり。

去年の菊月、同多摩郡櫻木村の知合の許から、近年にない庭の木の實の出来、玉川縁の散策をかねて泊掛に秋の色を味へ、池の鯉も肥つたといふ招を受けたので、勇をなし、木登も爲よう氣野山も駢る氣、袖、裾の足手纏、身のこなしまゝならずと、そこで制服。

但しいつも膚身を放さぬ、御存じの竹といふ情婦を、恭しく袱紗に包んで持つて出たのが、事の起因となつた。

土曜の午過ぎ、志した櫻木村、知合の家に着くと、待設の饗應あり、悉しうはこゝに贅せず。恰も當夜鎮守の祭禮、小さな社で、附屬の村數は多くもないから、土地自慢の口からも街道随一とは申さぬが、此の祭の夜に限り、役人の默許、内證でも大目に見て、五宿中の遊女屋が抱妓共に出出を許し、參詣をさせる例、御女郎衆の道中見ろと、いや出ます、出ます、意外の賑。話の種に見物を、と勧められて、要介が弗と思付いた、洒落が嵩じた惡戯、戀人の許に忍ぶより一段胸轟くと期しながら、上手に任せて耐へ切れず、東京ではまさかと思つた、恰も可し、箆竹は携へたり、五里でも八里でも踏出して居れば、旅の恥と度胸も極つて、一番周易速斷の看板を出し

て遊ばうと謂ふ。

然うすると、要介が話對手の當家の小旦那は、固より一名九曜軒一彩を心得て居るので異議のあらう筈なく、一所について居て判断を聞いても見たいが、折悪く免れぬ客來、人をつけて社まで送らせる事になり、然るほどにさても其時人やあると召さるれば、ほうと返事、猪を追ふ聲をして、作男の半六爺、庭から廻つて來て、御前に。

汝呼出す、別のことでない、東京のお客様、鎮守の夜宮に占の店を出さるゝ思召、大儀ながら供をして參れとあると、皮の厚い横手を打つて面白がり、先づ支度をと物置から、兩方の脚にする籠を兩個、張物板を運び出し、之に毛氈をかけるとして、行燈ではをかしのもの、洋燈では間に合す、提灯では張合なし、はて、何をがなと、一同四邊を眊したが、一段のものこそあれ、内の坊やが手遊にしては、大形の萬燈、直ぐに引剥がして半六が手細工で張換へる、要介はお手のもので、それに乾坤の卦を認めた、些と紅を入れて墨黒く、周易判断。

二

籠は二ツ層ねたるを背に負ひ、板を小脇にして半六、片手には件の看板に灯を點したのを直ぐに提灯のかはり。

「路々弘めになんびあ、と、大乘氣で早や出たが、昔々、板間ヶ原の合戦に勝手方敗北して落人といふ扮装である。」

「新造の御客がありましたら、先生、念入に占つて遣つて下さいまし。」と縁の敷居越に片膝を突いて小旦那は見送つた。

廣間には臺洋燈が三個、黒い天井の見ゆるまで明く照して、祭の客が五七人、丁度杯が禮に始まつた處、未だ座が亂れず、灰吹の音もトン／＼と聞え、

「行つて入らつしやいまし、」

「お静に。」

と田舎人の律儀さ、慇懃に挨拶されて、縁に腰、片足を膝にかけ、左の靴の踵を填めて居た要介は、慥う改まつて出られては大人氣なさの極悪く、急いで穿いて、衝と立直ると、ものをも言はず、莞爾しながら、すた／＼と中庭を横に、半六にすれ違ひざまにすつと出る。

「待たつせえ、私が先へ行きますべい、」と爺は看板の灯を差替した、構内の樹の蔭になつて座敷の灯も届かぬ暗がり、小兒が腕白の木馬にばつたり。

「や!」といったが要介横ざまにたじ／＼。

「危え、もし、だから言はねえこツちやあねえ、占者身の上知らずかい。はて、然やうなら若

旦那様行つて参じます。」

「ぢやあ、御苦勞だが、爺や、お氣をつけ申して、と身を起して小旦那は眞面目である。」

「はい、」此の九曜軒を背負つてものともしない、半六はしやつきりと足を構へて、

「待たつせえ、先生、然うせかゝするもんでねえ。」

要介は早や門の前、藪と藪との中を通ずる、狭くは無いが眞暗な路傍に待ちうけた。

「さあ、何か持つて行かう、したゝかな荷物だ、お氣の毒な。」

「何、お前様。」

「いや、大變だ、板はあるし、籠はあるし、其上兩手に持ものがあつては、歩行かれるもんぢや

ない、貸し給へ、其の板を持つから、」

「御心配は御無用だよ、」

「然うでない、そんなに御苦勞をかけては、私が氣が濟まないから、いゝや最う、あゝ、知つた人に見て居られちやあ、洒落でも極が悪いけれど、これから先は田圃道だ、よ、持つから半分此方へおくれ。」

「それまでに言はつしやるものだ、そんなら、はい、之を持たつせえまし、此の看板と、毛布でがさあ。あとは怎うやつて、がかいは大きうがすけれど、軽いもんだ、罷り違へば馬でも引擔ぐ

親仁だに、さあ、毛布を、」

「よし、」と取つて眞中を掴んで要介は肩に乗せたが、續いて渡す、周易判斷を描いた、萬燈を右見左見て、

「こりや消して行かうぢやあないか、些と道中が爲難いやうだ。」

「はれ、駄目い言ふもんでねえ、弘めになるだよ。畦道をお前様これを提げて歩行いて見させえ、馴れつこになつて人魂の飛ぶのには驚かねえ徒も、不審の打つて目いつけるだ。そこで鎮守様で店開、直ぐに太當、何うでござります。お前様、然うはにかなではいけましねえさ、」と呵々と笑ふ氣輕さに、要介もつい其の氣。

三

「先生、お前様、小錢の些と持つて居さつしやらぬか、」

「あ、澤山はないが、幾干ばかり、」と其ま、手巾と一所に突込んで置く衣兜の紙入を探つて、これは心付かなんだ、幾干ばかりと問ふまでもあるまい、親仁が骨折賃の催促と合點した、要介は、鎮守の背後なる畦道に、早や其の賣卜の新店を開いたのである。

渠は軍鶏籠を兩脚に、板を渡し、毛布を掛け、之へ彼の萬燈の看板を差置いたのを、前に控へ

て、杉の切株に腰を掛け、鎮守の森と、此の畦道とを劃つて流る、用水の小川の岸に、むらくと茂つた薄から、其の半身を顯したのが、店の蔭に蹲んで居る半六を些いと瞰下して、骨折賃の請求に應じようとすると、親仁は何事も思はぬ状で、

「幾干ばかりで無いてや、お前様持つてるだけ出さつせえ、私も青錢を交せてありつたけ足しますべい。」

「お爺さん、然うして又五宿をひやかさうぢやあないか、不可いよ、不可いよ、お前お祭酒に酔つてゐるから、」要介は苦笑する。

「はゝゝ、はゝゝ、いや、」

「串戯ぢやない、先の内は何か人前に煽り立てて置きながら、途中まで来ると酔が出て、自分で剛情を張つて持つて来た荷物を田圃道へ抛り出すッて、お前、弱らせ切つたぜ。酷い道だな、泥濘で驚いた、亂暴な、今の若さに賣卜でもあるまい、宿場を冷かさうなんて、幾歳になるんです。」

「九紫の午でがす、」

「えゝと六十二か。」

「當りました、はあ、魂消た、豪えもんだ。」

「馬鹿にすらあ、」と笑つたが、急に斜に構へてしやんと身繕をする、店の前を二人連の壮佼。

まばらな星の下に立つた、畦の榛の樹の中から出て来て、通りかゝつたが、二人とも頰冠、遊びに心が急くと見えて、振向きもしないでぶらりと行き過ぎる。

鎮守の境内は動揺めく物音、千筋百筋に入亂れて脚を交へ、袂を搦む、雑踏のほども思はるゝ、露店の裸火はこんもりとある森の中の、一際暗い處に赫と映つて、後にした背も暖いばかり、五宿をかけて街道筋から、群集の波が一分毎に、境内さして寄せ来る氣勢。

裏田圃は寂りして、風も冷いが熱する祭の氣を籠めたれば、今朝から晴れた空も半ば暗いやう、玉川の流は大廻りに、却つて、前の方から幽に響いて来て、三鷹村、深大寺あたりにト、ントンと絶えては續く鼓の調、耳を澄すと冴え切つて、遙に囃子が聞えるのである。

「評判々々！」

要助は、唐突に脚下から叫ばれたので吃驚した、鎮守の方でも人混の中に評判、評判。

「あ、評判、評判。」と半六は酒の醒際、氣疎い聲して、度外れな噓一ツ。

「ほう、先生又今のも素通りだあ、それだから、我、何でも鎮守様の鳥居際あたりで店を出さつしやいといふのに、お前様ありやうは含羞んだだ、口ぢやあ恁麼商賣は寂しい處でなければなんねえとツて、こゝらへお神輿のウ据ゑるもので、見さつせえ、人通せえ、ろくそつばうありは

しねえ。むかう前のおん女郎さ目的だで村の者なんざ、田圃道は鐵砲玉で飛ぶでがす、足の溜りやうはありましねえ。どんな賑な舞臺でも裏手へ廻ると、村芝居ぢやあないが忽ち暗討。」

と貧乏ゆるぎ一ツして、

「此の風の寒いことは、南無阿彌陀佛々々。」

然矣、爰にありて祭を聞くは、恰も大入の劇場を裏木戸から見趣。

四

萩原要介は喟然として、

「爺さん、御生だから其の念佛だけは御免蒙る。評判々々にも驚いたが、お前曩から一杯機嫌で、通りかゝる者を見ると、さあゝ占ぢや、占ぢやツて大聲を出したぢやあないか、何のことで。」と微笑みながら屹と睨む。

「九紫の午だよ。」

要介はチヨツと舌打、

「爲様がないな、交ッ返しが濟むと小い錢はないかツて宿場の非望だ、やがてお祭の評判々々ね、忽ちお念佛となります、からもう、神祇、釋教、戀、無常、一時だから可恐しい。」

「可いよ、幾干か差上げるから一杯飲んで来たまへ、天地玄妙の奥を探る術者の前に、お前のや

うな、アイヤ親方然やうでございが居た日にやあ、これでもお客が来た時に、甚麼交ツ返しが始
まらうも知れない、勿論、人通りも少いんだけれども、お前が鳥を散らすんです、宛然案山子見
たやうだ、」と態と眞面目らしい呶きながら、二ツ三ツ小粒なのを、

「さあ、添水へ御報捨、お布施ですよ。」と握らせた。

「これは、」

と親仁は額を撫でて、

「早や、これは何うも、曩細いと言ひましたは怎麼ことぢやありませんねえ、私も足すだから、
お前様も一握出さつせえ、然して、豪え先生で、澤山見て貰ひ人のあるやうに、机の上へ並べて
置くといふ謀計ださ、もし、早繼の粉でも、見切賣の瀬戸物でも、見さつせえ皆積んである、あ
れだよお前様。」と正直に辭退する。

「解つた、何、そんな人寄をするにも及ぶまいけれど、これはこれさ、私も些と薄ら寒くな
つた位、お前一杯飲んで来ておくれ、歸りには又手傳つて貰はなけりやならないから、」

「いんえ、しかしお前様、これは困ります。」と尙後込。

要介は心付いて、